

* 答えはすべて解答用紙に記入すること。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

今の報道機関は、人々に大きな影響を与えています。これは、報道に接した人の多くが、報道の内容を「真実」のものだと認識することが原因です。

それに関して、二〇世紀半ばに活躍した著名なジャーナリストのウォルタ・リップマンは、第一次世界大戦中の新聞報道の分析などを通して、①人々が物事に対して描くイメージが、報道によって大きく影響を受けたこと、を述べています。

リップマンは、人間が現実を認識する際、現実そのものを認識するのではなく、現実に対するイメージを頭の中で作り上げた上で現実を認識する、として、そのイメージを「疑似環境」と呼びました。そして人間は、現実に対してではなく、この疑似環境に対して反応する、と指摘したのです。

さらに彼は、人間の頭の中でこうした疑似環境が形成される際、報道が大きな役割をはたしている、と語っています。

しかし実際には、報道されたものごとは、事実そのものではありません。報道は、社会状況の全体像を映し出すAではなく、その一面を切り取ったものに過ぎません。それにもかかわらず人々は、報道されたことが現実そのものだとして認識してしまう、と彼は説明したのです(『世論』(上))。

リップマンは、彼の新聞記者としての経験から、新聞やラジオの報道が、現実の一面しか描いていないことを②熟知していました。ここではまず、紙面の大きさや放送時間などのXがあります。現実を、かざられた長さの言葉や音声などで表現するわけですから、そこに表現されたものが現実そのものでないのは、当然のことです。さらに、記者やその上司たちの思い込みや考えなどが報道内容に③反映される、といったこともあります。

しかしほとんどの人々は、それを「現実の環境」、つまり現実の姿だと思い込んでしまいがちです。そしてこれが、だんだんと人々の常識や知識となり、やがては社会の中に定着してしまう可能性がある、とリップマンは指摘したのです。

同じことは、現代の私たちにも当てはまります。多くの人々は、テレビや新聞、雑誌などで紹介されたことが、「真実」だと考えがちです。けれども実際には、それらは現実の一面でしかなく、別の面から見るとまったく別のことがいえる場合もたくさんあります。たとえば、ある事件が起きたとき、被害者の立場から見た報道と、加害者の立場から見た報道、あるいはその事件が起きた社会的背景について見た報道では、まったく内容が異なってくるでしょう。しかし私たちが、特定の新聞記事やテレビ報道にしか接することがなければ、その事件に対する私たちの見方は、Bになってしまいます。

それでは、「真実を知ること」(私たち人間には、すべての関連情報をもれなく収集し、分析するという意味で、全体の真実を知ること)はできませんから、正確にいうと、「真実にC」はむしろかしいでしょう。

その意味でも、ひとつの事件やできごとなどに関して報道を見聞きした際には、Dで、そうした事件やできごとなどの評価をしていかなければなりません。

このように、私たちが報道に接する場合、それが、「状況やできごとの一面だけ」を描写していることは、つねに心にとめておかねばなりません。

「犬が人を噛んでもニュースにならないが、人が犬を噛めばニュースになる」。

これは報道というもののひとつの側面を、たとえ話で表現した言葉です。ここで問題になるのは、その事件が珍しいかどうかという点です。

犬が人を噛む事件よりも、人が犬を噛む事件の方が、起きる確率は高いでしょう。

そのため報道機関は、どちらの方が被害が大きいかという点よりも、目新しさを考慮して、後者のような事件を報道することになりがちだ、というのです。

その端的な(IIはつきりとしていてわかりやすい)例が、最貧国などで起きている「飢餓」に関する報道です。

国際的な援助活動が続けている「国連世界食糧計画」(WFP)によれば、現在、世界には飢餓に苦しんでいる人々が約九億二五〇〇万人もいる、といます。これは世界の人口の八人弱にひとり、に相当します。

彼らの多くは、アフリカなどに特徴的な長期の干ばつは別として、地震や津波、火山の噴火や台風といった、比較的短期間に被害が発生する天災によって、日常生活が奪われたわけではありません。その地域のいびつな経済構造や長引く内戦など、社会の慢性的な欠陥によって、飢えに苦しみ、その命を早期に終わらせているのです。

しかしこうした状況が、報道によって紹介されることはほとんどありません。それは、飢餓があまりに慢性的な事態なので、斬新な映像や記事として表現することがむずかしいからです。しかし彼らは、飢餓に関する一見似たような映像や記事を発信しつづけた場合、視聴者や購読者がすぐにあきてしまうということも、同時によく知っています。大多数の人間は、つねに目新しい報道を求めるからです。これは、報道機関や媒体(IIメディア)に課された大きなXだといえるでしょう。

このように、非常に危機的な状況が存在していても、報道があまりなされないケースというものがあります。

世界の重要なできごとがすべて報道されるわけではないこと。とくに④変化にとぼしい慢性的な状況であればあるほど報道がなされにくいことは、覚えておく必要があるでしょう。

(眞 淳平『人類の歴史を変えた8つのできごとII』より)

問一——線部①「人々がう受けた」とありますが、それはどういうことですか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 「疑似環境」によって作り上げられた報道を、人々が現実だと思うようになったこと
イ 第一次世界大戦中の誤った報道を、人々が「真実」ではなく「疑似環境」だと思ったこと
ウ 社会の一面を切り取った報道をもとに、人々が頭の中に「疑似環境」を作り上げたこと
エ 人々の常識や知識が、報道によって社会の中に「疑似環境」として定着してしまったこと

問二 A にはどのような言葉が当てはまりますか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 絵画 イ 鏡 ウ テレビ エ カメラ

問三——線部②「熟知して」、③「反映される」の意味は何ですか。次のア～エの中から最も適当なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。



問四 X には同じ言葉が当てはまりますが、それは何ですか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 制約 イ 使命 ウ 自由 エ 義務

問五 B にはどのような言葉が当てはまりますか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア とてもばらついたもの イ とても似かよつたもの ウ とても片寄つたもの エ とても現実ばなれたもの

問六 C にはどのような言葉が当てはまりますか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 従う イ 迫る ウ 至る エ 学ぶ

問七 D にはどのような内容の言葉が入りますか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア それが「疑似環境」であることを認識し、うのみにしないこと

- イ 特定の新聞記事やテレビ報道を徹底的に分析し、批判すること

- ウ ほかの新聞記事やテレビ報道なども合わせて比較すること

- エ 「真実」といえるすべての報道を収集し、分析すること

問八——線部④「変化にうなされにくい」とありますが、それはなぜですか。五十字以内でわかりやすく説明しなさい。

問九 次の一文は本文から脱落したものです。これを本文に戻すにはどこが適当ですか。この一文が入る直後の五字をそのまま書き抜きなさい。なお、句読点や記号なども一字に数えます。

【脱落文】 「報道機関の職員たちも、多くの人々が飢餓状態にあることが、大きな問題であることはわかっています。」

問十 本文中には、反対の言葉を使ったことによつて意味の通らなくなった一文があります。その一文の始めと終わりの五字をそのまま書き抜きなさい。なお、句読点や記号なども一字に数えます。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

東京のマンションに一人暮らしの亜季は、仕事で大きなミスをしてしまった。そんな時、長野県で消防士をしている父から、急に出張で泊めてほしいという連絡が入った。仕方なく父と待ち合わせて先に食事をすることにした。

「だけど、こつちに出張なんてこともあるんだね」私が尋ねた。

「調布の消防研究センターに、ちよつとばかり用事があつてな」

自分の親のことでありながらも、仕事の内容など詳しくは知らない。勿論、父が消防士であることは小さい頃から分かっていた。いつだったか、火事の現場について尋ねた時、父は、「人様の災難を話すなんてことはできない」と首を振って答えた。面白味のない人だが、それは真面目な父のよい面でもある。そういえば、小学生の頃、クラスメイトの男の子から「沢村、お前んちの父ちゃんに言つて消防車に乗せてくれよ」と頼まれて困つたことがあつたっけなあ……。

注文したおにぎりは、四角い皿に載せられて運ばれてきた。黄色い沢庵が二切れ添えてある。

「なあ、亜季、お前、覚えてるか」

父は感慨深げに手にしたおにぎりを見つめながら尋ねてきた。

「一度だけ、お前たちにおにぎりを、いや、お弁当を作ってあげたことがあったなあ……」
「そんなことあったっけ？」

「あったよ。お前が小学校六年生で、久司が四年生の時の運動会だった」
「運動会？ あっ……」私は思わず顔を歪めてしまった。

「あの朝、お母さんの悲鳴で目が覚めた。一瞬何が起きたのか分からなくてびっくりしたけど……。お母さん、ベッドから起き上がった途端にギックリ腰やつちやつてな。そのまま身動きできなかった」
私も弟もぐっすり寝込んでいたので、まったく気づかなかった。

「それでもお母さんは偉いな。お前たちのお弁当作って言って台所に這って行こうとしたんだから。でもどう見ても無理だったし、ついオレが作るって言っちゃったんだな。弁当っていうか料理だって一度も作ったことなんかなかったのに。で、一応お前たちに持たせてやることでできたけど。後にも先にもあれが最初で最後の弁当作りだったなあ」

どこか②満足そうな顔で話をする父にはすまないけど、それはあまり思い出したくない思い出なのだ。

私は足が遅かった。いや、中途半端に遅いというのが正しい。うちの小学校では、一着から三着までは、順位の数字が染め抜かれた赤い旗の列に並び、それ以外は白い旗の列に一緒に並んだ。何も一着などとは言わない。でも、一度でいいから、ちゃんと数字のある旗の列に並びたいと、ずっと思っていた。六年生の運動会で、そのチャンスが巡ってきた。組み合わせの③妙なのだが、予行練習では三着に入れた。私は密かに本番を心待ちにしていたのだ。

当日の朝、母が腰を痛め、運動会に来られないことを知ったときには、さすがにがっかりしたものだ。それでも父がビデオに撮ってくれば、私の走りを母も見ることができるようだと、④一層頑張ろうと心に決めて登校した。

午前中のプログラムが終了して、昼食タイムになった。食事はクラスごとに広げられたシートの上でとる。

「お父さんが作ったんだからな」

出がけに、そう言われて父から手渡されたお弁当の包みを、なんの躊躇いもなく解いた。タッパーの中には、海苔に巻かれたおにぎりが二つと、卵焼き、ウインナーが無造作に入っていた。それだけ聞けば、ごく普通の内容なのだが、それはふと目に入った他の子たちのそれからすると、酷く見栄えの悪く見えるものだった。

そうだよ、これ、お父さんが作ったんだった……。でもそれだけなら隠しながらでも食べていたかもしれない。ところが……。

「沢村のおにぎり、でっけー、ヘンな形っ」

目敏いクラスメイトの男子が、私のお弁当を背後から指差し、囁し立てた。

当時の私にしてみれば、そのひと言で充分に傷ついたのだった。そして父に対して腹を立てた。

「なんかおなかいい……」と⑤周囲に聞こえるように言い訳すると、蓋をして片づけてしまった。

六年女子の徒競走は、二時半ぐらいに始まった。スタートのピストル音が響く中、どきどきしながら順番を待っていると、グルルッとおなが鳴った。声援が飛び交い、音楽が流れていたにもかかわらず、それははつきりと聞こえた。お弁当を食べなかったせいで、かなりおながすいていたのだ。

隣に座っていた雅代ちゃんが、「亜季ちゃん、おながが鳴った」と笑った。その声につられるように、他のクラスメイトからも笑いがこぼれ、緊張の場が一気に和やかな雰囲気包まれた。顔を紅くした私以外は……。

そんな恥ずかしさを引きずったことと、きつとおなががすいていたことも災いしたのだろう。スタートで出遅れた上に、力が出ずに挽回も叶わなかった。結局五着に終わり、数字の染め抜かれた旗の列にならぶことはできなかったのだ。そんな私の気持ちも何も知らず、ビデオカメラを向ける父に気づき、無性に腹が立った。

私は下校の途中で、友達と別れると、お弁当の中身を道端の側溝に捨てた。⑥悔しくて、情けなくて、涙が出た。

「ここよ」

エントランスのベンチに暗証番号を打ち込み、ガラスドアを開けた。

「オートロックか。なら安心だな」と父は指差し確認の動作をする。通路に設置された消火器を見ると、再び指差し確認をした。この調子では、部屋に入った途端、あちらこちら、指を差して回りそうだ。

「もう、いちいち、そうやって指差さないでよお」

「すまん、すまん、つい癖が出てな……」父は額に手を当てた。

私は父と向かい合わせに座った。

父はひと口お茶を啜ると「お前、戻って向こうで働くつもりはないか」と真面目な顔で切り出した。

「えっ？」

「もし、そういうことも考えられるなら、お父さんが現役の間に言ってくれ。大した力はないけど、現役の間なら少しは顔が使える」
「何言ってるのよ、だいたい、どんな職を用意できるっていうのよ」

「いや、まあ、そうなんだが……」

「ほーら、いいかげんなこと言わないで。そりゃあねハリウッド映画なら窮地に追い込まれた娘を颯爽と、かつ勇敢に救い出すような、スーパーパパさんっていう設定もアリかもしれないけど、実際、私の場合、⑦お父さんだもの……」

ちよつと言いすぎた。そんな自覚があった。

「まあ、そうだな、お前の力にはなれんか。心配するくらいが精々つてところだものな」父は淋しそうに目を伏せた。すると、電子メロディーが流れた。お風呂が溜まった合図だ。⑧ 助け船が有りがたい。

「お風呂溜まったから、お父さん、先に入って。私はそっちの和室にお布団敷いておく」

「そうさせてもらうか。ま、老いては子に従えってことだな。でも、子どものためにしてやれることが少なくなるっていうのも淋しいもんだ」

父はぼそぼそと言うと、「どっこいしょ」と腰を上げ、旅行鞆の中からグレーのスウェットを取り出した。

「私は、まだやることがあるんで、上がったら、気にしないで先に寝ちゃっていいからね。あ、電気消すのだけ、お願い」

「おう」

軽く手を上げて脱衣所に向かう⑨ 父の背中が妙に小さく見えた。いや、そうさせてしまったのは私なのかも……。しかし、いくら親子といえども解決できないものもある。私だって、父に手助けしてもらってどうにかなるようなことなら頼ってみたい。

和室に父の寢床を用意し、私は自室に入った。

しばらくすると、父が風呂から上がった気配がした。

「無理せず、ちゃんと寝ろよ」ドア越しに父が声を掛けた。

「うん、分かってる」ドアを開けずに答えた。

「じゃあ、おやすみ」

「はい」

困ったことに、集中しようと思ってもそれができない。ベッド脇に置いた目覚まし時計の針の音はまるで催眠術師の言葉のように瞼を重くする。こんなことで眠ってたら……。だめじゃない、私……。

自分のくしやみに驚いて目が覚めた。

「うわっ」いつのまにか、突っ伏して眠ってしまった。顔を載せた腕が痺れている。一体何時？

ええつ、朝？ あ、お父さんは？

我に返り、慌てて居間に出た。カーテンの隙間からオレンジ色の光が漏れている。周りを窺ったけど、父の気配はどこにもない。和室を見ると、布団がきちんと畳まれていた。

黙って行っちゃったんだあ……。私は食卓の椅子に力なく腰掛けた。

すると、ラップの掛ったお皿があり、白く丸いものが二つ載っていた。おにぎりだ。そして、その脇に、メモ書きが残されていた。いや、これは手紙だ。

亜季へ

声を掛けたが、寝ているようだったので、そのままにしておいた。突然来て、泊めてもらってすまなかった。しかし久しぶりに亜季と話せてよかった。

忙しいだろうけど、健康にだけは気を使うように。それからちゃんとメシを食え。腹が減ってはイクサはできぬだ。お母さんのように上手く結べないが、おにぎりを作っておく。

勝手に台所をあっちこっち探して、またお前に叱られそうだが、許せ。

残念ながら、親としてお前にしてあげられることは少なくなった。これくらいのことしかできないが勘弁してくれ。インフルエンザに注意するように。今年の暮れには帰省するように。みんなで年越し蕎麦を食べよう。

父

夢うつつの中で何か物音がしていたような気がしたけど、それは夢ではなく、父が台所に立っていた音だったのだ。

食卓の上のおにぎりに手を伸ばす。それは運動会の日に作ってくれたものと同じように、なんとも大きくぶかっような姿をしている。

「お父さん……。おにぎりは三角形だって知らないの？ もう、ばっかじゃないの……」

可笑しくなって、そんなふうが悪態をついた。大きな口を開けてかぶりついた。少し塩っぱく感じたのは、父が塩の量を間違えたのではない。

⑩ 今度はちゃんと食べるよ、ひとつも残さずに……」

（森 浩美『家族ずっと』より）

問一——線部①「頼まれて困った」とありますが、それはなぜですか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 父は無口で、娘の自分には、父がどのような仕事をしているのか分からなかったから

イ 父は真面目な人であり、仕事に遊びを持ち込むようなことは頼めなかったから

ウ 父は面白味のない人なので、人を楽しませたりすることには興味がなかったから

エ 父は頑固で、自分がこうときめたら娘の頼みであってもきいてくれるはずはないから

問二——線部②「満足そうな顔で話をする父」とありますが、この時の父の気持ちはどのようなものですか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 娘のために何かしてやれたという良い思い出の一つをかみしめている
- イ 一度も料理をしたことがないにしては、うまくできたと、得意に思っている
- ウ 幼かったころの娘の姿を思い出し、そのいとおしさを再確認している
- エ 昔のこともしっかりと覚えていることが、家族を思っていることの証明だと考えている

問三——線部③「妙」とありますが、どのような意味ですか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 混乱 イ おかしさ ウ 幸運 エ 結果

問四——線部④「一層頑張ろう」とありますが、この時の私の気持ちはどのようなものですか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 自分が旗の列に並べば、見に来ている父だけでなく母も喜び、具合もよくなるだろうという思い
- イ 自分も旗の列に並びたいが、それ以上に、運動会に来られずに残念がっている母を喜ばせたいという思い
- ウ 真面目な父が仕事を休んできているうえに、お弁当ももらったのだから、何とか父を喜ばせたいという思い
- エ 母が来られず気落ちしたが、せっかく旗の列に並ぶチャンスなのだから、あきらめずにやろうという思い

問五——線部⑤「周囲に聞こえるように言い訳する」とありますが、この時の私の気持ちはどのようなものですか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア からかわれたことに対する不満を、別の言葉で表そうという気持ち
- イ 父に対する不満を、お弁当を食べないことで示そうとする気持ち
- ウ 自分が男子の言葉に傷つけられたことを、だれかに気づいてほしいという気持ち
- エ 見かけの悪いお弁当を人に見られないように、周りに対してとりつくるう気持ち

問六——線部⑥「悔しくて、情けなくて」とありますが、その理由として**適当ではないもの**を、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 旗の列に並ぶことができるチャンスだったのに思うように力を出せなかったから
- イ 父のせいでひどい目にあったのに、まったく気づいてくれないから
- ウ 運動会に来られなかった母のためにも活躍したかったのに、できなかったから
- エ 父の作ったおにぎりを、人目を気にせず堂々と食べてあげられなかったから

問七——線部⑦「お父さんだもの……」とありますが、この後に続く内容を考えて十五字以内で書きなさい。

問八——線部⑧「助け船が有りがたい」とありますが、これはどのようなことですか。六十字以内でわかりやすく説明しなさい。

問九——線部⑨「父の背中が妙に小さく見えた」とありますが、これはどのようなことですか。次のア～エの中から最も適当なものを**適当なもの**を選び、記号で答えなさい。

- ア 娘である自分が成長し、父の背だけを追い越してしまったことを改めて感じたということ
- イ 以前の力強い頑固な父ではなく、老いておだやかになったことに初めて気づいたということ
- ウ 娘を手助けすることはできないと知った父が、気落ちしてしまったように感じたということ
- エ 父が自分を助けてはくれないと知って、自分の中でその存在感が薄れてしまったということ

問十——線部⑩「今度はちゃんと食べるよ」とありますが、この時の私の気持ちはどのようなものですか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 父がこりずにおにぎりを作ったことにあきれながらも、父の精いっぱい愛情なのだから認めようとしている
- イ 小学生の時は理解することができなかった父の不器用な優しさを、ようやく素直に受け止められるようになっていく
- ウ 小学生の時はいやな思いをしたが、今度は誰にも見られないので、ぶかつこうでも食べようとしている
- エ おにぎりで娘を助けたつもりになっている父をあわれに思い、今度は自分が優しくしてあげようとしている

三 次の①～⑧の——線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- | | | | | | | | |
|---|-------------|---|-----------|---|--------------|---|-----------|
| ① | ホケン証を医者に見せる | ② | 面会シヤゼツ | ③ | リサイクル運動のスイシン | ④ | タレ幕を取り付ける |
| ⑤ | コードをひもでタバねる | ⑥ | 裁判員のシュヒ義務 | ⑦ | 昔話のデンシヨウ | ⑧ | サンピ両論 |

＊の欄には何も書かないこと。